飛騨のさるぼぼ（飛騨のさるぼぼ製造協同組合・岐阜県）

〝超限定〟にこだわり、「さるぼぼ」を日本一の土産物に

社団法人中部開発センター
客員研究員　坂口　香代子

「ミシュラン」が発行する旅行ガイドブック『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』(※1) 2009年版に、最高峰の三つ星（わざわざ旅行する価値がある）の評価で掲載される飛騨高山（岐阜県）。今や日本を代表する観光地として海外からも注目されるこの地域には、土産物としても日本一を目指そうという郷土民芸品がある。大きく丸い顔に両手両足を広げた形が特徴的なお守り人形「飛騨のさるぼぼ」だ。2007年には地域ブランド (※2) にも認証された。しかし、実はこのような人形はもともとは飛騨地方特有のものではない。ではなぜ、今、飛騨でしか出会えないのか。その経緯とともに、ここ十数年来、さるぼぼがこの地域の雇用を創出する存在となっている現状とこれからを紹介する。

（※1）日本ではミシュランといえばホテル・レストランガイドの『レッドガイド』が有名だが、もう一つ世界各国の観光ガイドとして世界で150万部超の販売部数を記録（2007年度版）しているのが『グリーンガイド』。ミシュランが1926年から発行する歴史あるシリーズである。ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンは2009年３月16日にフランス語版、９月には英語版が刊行予定。

（※2）これまで非常に厳しかった「地域名と商品・サービス名」が結びついた商品の商標権の登録用件を緩和し、地域の活性化などに役立てようという新しい制度が2006年４月１日の商標法改正によりスタート。

1.「飛騨のさるぼぼ」とは

子どもの一生に
福を呼び込む願いを人形に込めて

「飛騨」とは、岐阜県北部を指す地域名称であり、その中心地である高山は古くから「飛騨高山」と一般に呼ばれてきた。

「さるぼぼ」は、その飛騨地方で、古くから家々の母親が「娘や孫が健やかに育つように、幸せになるように」と願いを込めて、玩具兼お守りとして子や孫（主に女の子）につくり与えてきた人形である。

胴体と顔が赤い布で作られ、両手両足を広げた形と顔が描かれていない姿が特徴的である。

飛騨弁で「猿の赤ん坊」を意味

「ぼぼ」は、飛騨の言葉で赤ちゃんのこと。つまり「さるぼぼ」とは「猿の赤ん坊」という意味で、赤い顔と身体が猿の赤ん坊に似ていることから名付けられたと言われている。全身にわたって赤いのは、赤という色が古くから悪霊祓いや疫病除けのご利益があると信じられ（特に江戸時代に天然痘が流行以降）、さるぼぼの一般的な色となったようだ。

また、「猿」という言葉は、「災いが“さる”」、「家庭“猿”満（かていえんまん）」、「“猿”むすび（えんむすび）」にもつながり、厄除けや縁結び、安産のお守りとしても、各家庭に伝わってきた。

飛騨の観光地化が進む中で、30年ほど前から、昔ながらのさるぼぼを少し現代風にアレンジしたお土産品としての「飛騨のさるぼぼ」がつくられるようになり、今では飛騨地方のどの観光地においても必ずといっていいほど見られる飛騨のお土産品として定着。スタンダードは、四角い赤い布の四隅をつまんで縫い、中に綿を詰め込んだ胴体に、目鼻口が省かれた赤く丸い顔が乗った姿かたちをしており、それに黒い頭巾と黒い腹掛けを纏っているぬいぐるみのような人形である。両手両足を広げている姿が、まさに赤ちゃんを彷彿とさせる。また近年は赤以外のさるぼぼも登場している他、さるぼぼを材料に人形以外のさまざまなお土産品もつくられている。これについては、あとの「飛騨のさるぼぼ製造協同組合の取り組み」において紹介する。

高山市街地と乗鞍岳。（高山市提供）

伝統的な郷土民芸品としてのさるぼぼをもとに作られた、現在お土産品として売られているさるぼぼの定番品。（高山市提供）

高山市内の土産物屋では、さまざまなさるぼぼ製品が並ぶコーナーを設けているところが多い。

2.「飛騨のさるぼぼ」のこれまで

遣唐使が持ち帰った人形が起源

では、ここで少し、さるぼぼの歴史を振り返ってみたい。もっとも確かな文献が残っているわけではないため、飛騨のさるぼぼ製造協同組合の代表理事である中澤さんが収集した情報と幾つかの参考文献(※3)をもとに、おそらくこのような流れであっただろうという歴史を紹介することにする。

さるぼぼの姿かたちやそれが作られた背景にある風習は、元をたどれば飛騨生まれというわけではないようだ。奈良時代、中国から遣唐使が持ち帰ってきた人形がその原型ではないかと考えられている。当時の貴族の間で、お妃の安産のお守りとして枕元にその人形を置いて安産を願うことが流行。その頃は「天児（あまかつ）」と呼ばれていたという。

その後、この人形は大きく２種類に分かれていく。

(※3)「サルボボの由来」(高山市教育委員会)、「会報斐陀(1992)」(高山市歴史研究会1992)、「サルボボの容姿の変遷に伴う縫製方法と赤い布で作られた意味の研究」(徳山孝子)

一つは、「くくり猿」へ

一つは、信仰の対象である。主に現在も日本各地に残る庚申堂（こうしんどう）の「くくり猿」がそれである。一般に庚申堂は「庚申さん」と呼ばれ親しまれているが、これは稲荷神社のキツネと同じように、猿を神の使いとしている信仰である。大阪の四天王寺庚申堂、京都の八坂庚申堂が有名だが、あの寅さんの帝釈天の中にも庚申堂があり、今も60日に一度、庚申祭りが行われている。

さるぼぼの紹介には少し余談のようだが、後で紹介する飛騨のさるぼぼ製造協同組合の取り組みと結びつくことでもあり、庚申堂とくくり猿について簡単に紹介したい。「庚申」とは、干支（えと）の組み合わせの一つで、十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を甲子、乙丑、丙寅…と組み合わせると全部で60種類の組み合わせができる。その一つが「庚申」で、「かのえさる」「コウシン」と読む。これを暦に当てはめると、60日ごとに庚申日が訪れ、60年に一度庚申年が巡ってくるということになる。ちなみに「還暦」の祝いは、この60の干支の組み合わせが一巡したことを意味している。

さて、中国の道教では、この「庚（かのえ）」「申（さる）」の日である庚申の日の夜に、人間の体の中にいる三尸（さんし）という虫が、寝ている人間の体を抜け出しては天帝にその人間の悪行を告げ口し、寿命を縮めると信じられてきた。そこで人々は長生きを願い、夜通し起きていることで三尸が体から出て行くのを防ぎ、寿命が縮まないよう身を慎んだ。これが日本に伝わり、平安時代の貴族社会では、庚申の夜は無病息災を願いながら眠らないで過ごすという風習になったという。そしてその風習が鎌倉時代の武家社会を経て少しずつ民衆の間に浸透し、江戸時代には全国規模で広まり各地に庚申を祀る集団「庚申講」が結成され、やがて民間信仰の中心的な存在の一つとなっていったと言われている。

その一つとして、高山市にも飛騨国分寺境内に庚申堂があり、くくり猿が祭られている。このくくり猿、まさに猿が手足をくくられて動けない姿を表しているが、これは、欲のままに動く猿を人間の中にある欲望に喩えているという。日本三大庚申の一つ八坂庚申堂の「くくり猿」の説明を要約すると、人は誰しも夢や希望を持っているが、その夢を叶えようとする過程で余計な欲望まで湧いてきてしまい心が乱れてしまうことがある。そ

高山市内の飛騨国分寺境内にある庚申堂。「くくり猿」が奉納されている。

んな時、心をコントロールしてくれるのが「くくり猿」。くくり猿に願いを込めて欲をひとつ我慢すると、願いが叶うというわけだ。

「さるぼぼ」は日本のぬいぐるみの原型

一方、庚申信仰のくくり猿とは別に、遣唐使が持ち帰ってきた人形は、その後貴族から庶民の中に浸透していき、各家で母親や祖母が抱き人形を子供に作り、健康や出産を願う風習として室町・江戸時代にかけて広がっていった。これは一般には「這子（ほうこ）人形」と呼ばれるもので、日本中で作られたという。

「這子」は、白い練絹で頭と胴体が作られ、頭と胴と手足に綿などを詰めて、幼児が這い這いする姿をかたどった人形で、旧暦の３月３日の上巳（じょうし/じょうみ、現在でいう桃の節句）に厄災を祓う身代わりの役をつとめるためにつくられ、幼児の枕辺に置かれたという。それが次第に変化して、幼子が３歳になるまで身に添えて持たせるなどの風習も生まれ、それでままごとをして遊んだりする玩具となっていったようだ。

「布を縫合し、綿などを内部につめて人や動物などを形にした玩具」という点で、日本のぬいぐるみの原型ともいえる這子の容姿は、頭に黒い絹糸で髪の毛が植えられ、目と鼻と口が描かれている点を除き、全体はさるぼぼを彷彿とさせる姿かたちである。赤い色で作られた這子があったこともわかっており、江戸時代に天然痘が流行し、赤色が天然痘に効力を示す色だと信じられていたことから赤い這子が生まれたと考えられている。飛騨では、それが猿の赤ちゃんに似ていることから「飛騨のさるぼぼ」と呼ばれるようになったのである。

古い抱き人形の文化が飛騨で残った理由

這子の流れを組む古い抱き人形の風習は、明治の初め頃までは全国各地で見られた。しかし、時代とともに次々と可愛い人形が出てくる中でだんだんと廃れていき、最も長くその風習が残っていたのが飛騨地方だったと考えられている。ではなぜ、飛騨では残ったのだろうか？その理由を中澤代表理事は「非常に山深い田舎だったことで、高いお人形さんが買えないということがあっただろうし、古いものを大切にする飛騨人気質があったからだろう」と語る。飛騨は、一説によれば、山谷が多く、山が何重にも重なっている「襞（ひだ）の地」ということで「飛騨」と呼ばれるようになったと言われており、その地理的特性から他の地域に比べて古い風習が守られやすい地域であったのかもしれない。

しかし、その飛騨のさるぼぼも、戦後にはすでに廃れつつあったようだ。「あのまま行けば、おそらく今は飛騨でも忘れられた存在になっていたかもしれません」（中澤さん、以下敬称略）。それが、今、「さるぼぼと言えば飛騨」として多くの人に認知されるようになったのは、今から30年ほど前ある工夫をきっかけに「さるぼぼの持つ意味、魅力を生かした、現代に受け入れられるお土産品」となったからである。

江戸時代後期の馬鈴につけられたさるぼぼに似た人形。馬を売買する馬市に馬を連れて行く際、お守りとしてこのようなさるぼぼに似た人形をつけた鈴を馬の鞍につけ、しゃんしゃんと鳴らしながら市に行ったという。

お土産としての「飛騨のさるぼぼ」の誕生

さるぼぼが、本格的にお土産として土産物店に並ぶようになったのは、1978年（昭和53年）ころからである。高山市にある土産物用の絵葉書や昔話を製作販売していたオリジナル観光出版が、「飛騨のさるぼぼ」という商品として製作販売したことが、そのスタートだった。

しかし、発売当初は、全く売れなかったという。「赤黒であまりにも強烈」、「目がないので気持ち悪い」と言われることも多く、土産物屋に営業をかけても「こんなものは売れん」という返事がほとんど。そんな状態が１年ほど続いたが、「さるぼぼとはいったい何だろう？」とさるぼぼの意味をもう一度見つめ直したのだという。そして、さるぼぼの意味に込められた思いを伝えることが大切であると考え、その旨を書いた説明書を人形に付けたのである。さらにさるぼぼの由来を書いた看板を売り場に設置してもらうようにしたところ、それが女性観光客の共感を得て、何と説明書付きのさるぼぼを売り出したその日から売れるようになったのである。

また、サイズももともとの抱き人形のような大きいものや、里の母親が安産のお守りとして娘に持たせるための人形のサイズ、縁結びのお守りとして手持ちの鞄に入れておけるサイズのものなど、大中小揃えたことでさらに売れるようになった。

その後、順調な売れ行きの中で同業者が生まれ、

現在、さるぼぼのサイズはさらに細かく分かれており、この写真に並ぶだけでも、12サイズある。

現在、さるぼぼの製造業者として事業を行っている会社は４社。また、高山の観光ポイントの一つである「朝市」でも、地元の“おばちゃん”たちがそれぞれ独自のさるぼぼを作って売っており、それらを含めると、現在、飛騨高山では、非常に多くの人がさるぼぼ作りに関わっている。

３．「飛騨のさるぼぼ製造協同組合」の取り組み

地域の雇用を支える使命を持って 2006年、組合を設立

先に紹介した高山市内のさるぼぼ製造会社４社によって2006年６月に設立されたのが「飛騨のさるぼぼ製造協同組合」である。設立からまだ３年にも満たない組織だが、すでにさまざまな取り組みを積極的に行っている。

設立の目的の一つは、地域の雇用を守るためである。きっかけは、10年ほど前に韓国製の飛騨のさるぼぼが現れ、次に中国製、ミャンマー製と続き、国内でも京都の業者が飛騨のさるぼぼづくりに参入。それらの製品は、飛騨製に比べて安いものだったが、結果的には出来が悪かったことから、ほとんど売れなかった。しかし今後の展開を考えると、地域の発展と雇用を守るためには地元で協力していかなければということを痛感。これが組合設立の背中を押したのである。

現在、飛騨地区には500人以上の内職者がいると考えられるが、さるぼぼは一つひとつ手づくりで丁寧に作られる製品で、内職者がその担い手となっているのである。また、今や、さるぼぼを材料とした土産物品は、非常にバリエーション豊かで、この地域でさるぼぼに関わって生活をしている人は何千人という数に上り、さるぼぼは、まさに地域の雇用を大きく支える存在となっているのである。

全体として製品の品質を向上させ、価値ある観光の目玉に

組合設立にはもう一つ目的がある。それは飛騨

のさるぼぼを飛騨の工芸品として価値あるものに高めるために、製品の品質を総じてアップさせることである。例えば､朝市に並ぶさるぼぼ製品は、個々がそれぞれ作って売っており、非常に優れた品質の魅力的な製品もあるが、中には飛騨のさるぼぼの価値を落としかねない品もあり、組合という立場で、品質のいいものを作ってもらう指導やアドバイスを行っていきたいという。

庚申堂に「願掛けなでさるぼぼ」を寄贈

飛騨のさるぼぼ製造協同組合では、組合を設立した年に、まず飛騨高山の観光PRになればとさるぼぼの着ぐるみをつくり、高山観光協会に寄贈した。

さらに2007年４月には、さるぼぼの歴史の中で紹介した飛騨国分寺境内にある庚申堂に、組合として「願掛けなでさるぼぼ」を寄贈して、国分寺の住職に法要をして心を入れてもらった。同じ起源を持つくくり猿とさるぼぼが、長い時を経てまた縁を結ぶという、何とも粋な計らいである。

さて、その名の通り、願いを込めてなでると念願が叶うというこのさるぼぼのお地蔵さまは、国分寺周辺の商店街の振興にもご利益をもたらせているようで、設置以来、商店街に立ち寄る観光客が一気に増えたという。観光バスのガイドが来て説明をしている姿もよく見られるようだ。

願いが叶ったあとは、しっかり供養

もう一つ、願掛けなでさるぼぼと合わせて設置されたのが､「満願成就の棚」である。これは、さるぼぼを購入した観光客の「かわいそうで捨て

オリジナル観光出版で働く左から國政さん（パート暦１年）、中野さん（同10年）、大坪さん（6年）。子育てをしながらでも働きやすい勤務時間になっており、長年勤める人が多い。

飛騨国分寺境内にある庚申堂に設置された「願掛けなでさるぼぼ」。

内職者に発注、納品を行う内職センター。

願いが叶い不要になったさるぼぼをかける「満願成就の棚」。

られない」という声をもとにつくられたもの。今、さるぼぼを購入すると、商品によっては、さるぼぼの由来とともに「願いが叶い不要となった時にはお返しいただければ供養します」という旨の説明書が添付されている。「まだ、全てにインフォメーションが行き届いていないところはあるが、１年に１度、庚申祭りを行い、返却していただいたさるぼぼをしっかりと供養したい。観光がてら持ってきて頂いてもいいし、組合まで送って頂いてもいいですよ」（中澤）という。

「飛騨のさるぼぼ」を守る特許への取り組み

同じく2007年には、組合として「飛騨のさるぼぼ」の地域団体商標に申請し、いわゆる地域ブランドとしての認証を受けた。「現在は特に、この特許関係に力を入れており、飛騨のさるぼぼをしっかりと守り育てようと考えている」（中澤）という。

2008年には、岐阜県郷土工芸品の指定も受けている。

現在は、立体商標を申請中である。立体商標とは、商標法改正によって新たに新設された、文字や図形だけではなく人形や容器などの立体的形状による商標を認める制度で、地域団体商標と同じく公知が条件。

面白いと思ったことはどんどんやる

組合としての取り組みとは違うが、飛騨のさるぼぼは今、「さるぼぼロボット」として、次世代の子どもたちの教育にも一役買っている。

2006年に、中澤さんのもとを、岐阜県でロボット教室を開いている平光さんが訪ねてきた。さるぼぼをベースにした自走ロボットをつくり、子ども向けの教材として使いたいという依頼である。ロボットをつくるというと少し身構えてしまうが、さるぼぼが題材になっていることで親しみが持て、子どもたちの取り組み意欲も違うだろうというのが平光さんの狙いだった。中澤さんは「面白いからやろう」と二つ返事で承諾。岐阜女子大の安藤久夫教授（電気電子制御・教育工学）を紹介され、協同で製作。光センサーで黒いラインをロボット自ら感知して自走する「さるぼぼロボット」が誕生した。現在、このロボットは、安藤先生や平光さんが自らの授業で使っているほかに、いろいろな高校にも先生とともに出張し、生徒たちが意欲的にロボットづくりに取り組める大きな助けになっているようだ。

「さるぼぼロボット」。高さ約20㎝、体の部分は木製で、本体内部のモーターと乾電池が埋め込まれている。

このように、飛騨のさるぼぼ製造協同組合は、さるぼぼの、そして地域のこれからに向けて、いろいろな仕掛けを次々と始め、さるぼぼの魅力を

【飛騨のさるぼぼ製造協同組合　概要】

所 在 地：〒506-0055
岐阜県高山市上岡本町３丁目376番地
TEL　0577－35－1230
組合員数：４社（高山市内でさるぼぼ製造に従事する事業所）
賛助会員：35社
地域ブランドに認定されたブランド名：
飛騨のさるぼぼ（2007年10月認定）

さまざまなさるぼぼが次々登場

さるぼぼ本来の抱き人形型や観賞用人形型の他に、新商品が次々と生み出されており、最近はそのバリエーションも実に多彩。携帯ストラップ、キーホルダー、耳かき、チャイム、お手玉、リース、さるぼぼ付厄除けとうがらし、でんでん太鼓などの玩具、食器、備長炭入り枕、貯金箱などの実用品等々。さらに食品ではおせんべいや飴などの菓子製品の他、カレーライスも登場。企画商品としては、生まれた時の赤ちゃんの体重をそのまま再現（指定の体重に調整）するオリジナルさるぼぼも。色も、風水をもとに金運、仕事運、健康運、恋愛運などそれぞれのパワーを持った、各色のさるぼぼも登場している。

風水の6色のパワーを込めた風水さるぼぼキーホルダー。左から緑（健康運）、黄（金運）、青（仕事・学業運）、紫（成功・出世運）、ピンク（恋愛運）、黒（魔除・厄除運）。

備長炭入りさるぼぼ枕。商品説明には「ミニサイズですので、オフィスでのお昼寝タイムなどにどうぞ」と。

携帯ストラップ

さるぼぼの形をしたサブレが入っているお菓子

さるぼぼの絵のついた木製賽銭箱形の貯金箱

現さるぼぼの柄が入った藍古染湯呑

高山の街中で出会うさるぼぼ（1）：コンビニエンスストアの前で顔を出すのは少し勇気がいるかも。

高山の街中で出会うさるぼぼ（2）：市内の観光ポイントを周遊する「さるぼぼバス」。１日フリー乗車券は大人600円。

高山の街中で出会うさるぼぼ（3）：お煎餅屋さんのカンバン娘？

広く公知しようと取り組んでいるわけだが、実は一方で､｢始めない･広げない･超限定｣にこだわった戦略をとっている。それについては次の「飛騨のさるぼぼのこれから」で紹介したい。

４．飛騨のさるぼぼのこれから

インタビュー

飛騨のさるぼぼ製造協同組合　代表理事　中澤　澄夫　氏

女性の一生を見守り続ける さるぼぼに再び命を

―「これから」をうかがう前に、少し、飛騨のさるぼぼのこれまでと今についての補足質問をさせてください。現在、高山の中心市街地を歩けば、いたるところでさるぼぼと出会えますが、30年ほど前、これは当たり前の風景ではなかったのですね？

中澤　ええ、そうです。もちろん土産品店にもありませんでしたし、風習としてもこの飛騨の地からも消えようとしていました。

―中澤さんはそのさるぼぼに、飛騨の昔話を取材中にたまたま出会ったということですが､当時、時代とともに忘れられかけた人形に、なぜ、興味を持たれたのでしょうか？

中澤　赤黒で目がない強烈なイメージだったことと､これは「女の子の一生だ」と思ったことです。女性の一生に福を呼び込むものとして、こんなにいいものはないと。生まれた時に健やかな成長を願って贈られ、子どものころはおままごとなどで使う。年頃になったら縁結びを、結婚してからは夫婦円満や安産を願う。そして生まれた子どもに今度は自分がさるぼぼを作り、その子の一生を願

うわけです。飛騨では、お雛様代わりに里の親が娘に作ってあげたとも言われており、女性にとってさるぼぼは、一生の節目節目に側にいてくれるとてもやさしいお守りなのです。

―それが、発売当初、全く売れなくても、中澤さんの気持ちが少しもぶれなかった理由でもあるのでしょうね。さて、飛騨国分寺境内内の庚申堂に設置された「満願成就の棚」は、購入者からの声をもとにつくられたということですが、購入者からお便りは頻繁に来るのですか？

中澤　まだ頻繁というわけではありません。しかし、たまに願い事が成就したというお礼状をいただきます。こういったお便りは我々にとってうれしく非常に励みになります。少しでも買っていただいた方々のその後のお役にも立ちたいという思いから「満願成就の棚」をつくったのです。

今、さるぼぼを“作る”ことにも熱い注目が

―もう一つ、高山では、「さるぼぼ作り体験」が、飛騨高山思い出体験館や高山グリーンホテル飛騨物産館などでできるようですが、さるぼぼ作りには実はストレス軽減や癒し効果があるとか？

中澤　私もこれには「実はそんな効果もあったのか」と驚きました。POMSという検査方法で岐阜薬科大と岐阜大学、そして県健康レクリエーション協会の協同研究でわかったことです。

さるぼぼというのは、もともとはどの家の母親も作っていたもので、簡単に言えば布の四隅をつまんで縫い、中に綿を詰め込むだけですから、その上手下手はあったとしても誰でも作ろうと思え

購入者から送られてきた、願いが叶ったというお礼の手紙とさるぼぼ。

高山グリーンホテル飛騨物産館内の一角にある「さるぼぼ作り体験教室」風景。昔ながらの飛騨の家の居間を再現したような雰囲気のある場所で体験ができる。

針・糸・ボンドを使ってさるぼぼを組み立てる「体験コース」は実際のやり方にほぼ近い、本格的なさるぼぼ作りが体験できる。所要時間は30分～1時間（1,500円～）。インストラクターがポイントをわかりやすく教えてくれ、小学生でも体験を十分楽しめる。

最後に腹掛けに自分の願いを書いて、自分だけのオリジナルさるぼぼが完成。

ばできるものですが、今は簡単に体験ができ、しかも心が癒されるのです。検査は平均年齢30.4歳の男女62人に心理テストを実施し、体験前後の感情の変化を緊張、抑うつ、怒り、活気、疲労、混乱の６つの尺度で調べたところ、陽性感情である「活気」が体験前より高くなったわけです。

日本一の民芸品、日本一のお土産に

―さるぼぼは、それを贈られる側に福を呼び込むだけでなく、作り手側にもご利益があると。非常に興味深いですね。
では、「これから」についてお聞かせください。飛騨のさるぼぼの今後の展開をどうお考えですか？

中澤　現在、この地域の雇用も生み出す産業になっていますから、観光協会からも「がんばれ」とはっぱをかけられます（笑）。私たちはさるぼぼを日本一の民芸品、土産品にしたいと思っていますし、子々孫々まで親しまれるものにしていきたいと思っています。そのために私たちがこれまでも、そしてこれからも考えたいことは“超限定”にこだわるということです。

「飛騨に来れば買える」という戦略

―“超限定”とは？

中澤　「さるぼぼは、岐阜県、もっと言ってしまえば飛騨に来ないと買えない、飛騨に来れば買える」という戦略です。名古屋にも東京にも大阪にもあったら価値がない。名古屋や大阪からもよく卸してほしいという依頼がきますが、全てお断りしています。地域限定にこだわっているのです。とにかく飛騨に来て買ってもらいたい。さるぼぼは、そうすることで、子々孫々まで残るお土産品になると考えているのです。

ただ現在、今の話に反するようですが、実は国内で２か所、飛騨以外で飛騨のさるぼぼが買える場所があります。

高山市内を流れる宮川沿いで開かれる「宮川朝市」風景。冬は氷点下10度以下の日も多々あり、季節がら他の季節に比べ並ぶ店の数も品物の数も少ないが、取材当日は中国語などもチラホラ聞こえ、大勢の観光客で賑わっていた。さるぼぼは朝市でもやはり定番品になっているようで、店の約半数で売られていた。

―それはどこですか？

中澤　セントレア（中部国際空港）と成田空港です。これは、今回の旅では残念ながら飛騨に来てもらえなかった海外からの観光客に「日本のお土産」として、最後に買って帰ってもらう品として空港に置いているのです。そして次には、さるぼぼがあるこの飛騨に来ていただけるように。国内はもとより世界から飛騨に人を集め、日本のお土産としての飛騨のさるぼぼを世界に広げたいと考えています。

結びにかえて

今、「飛騨地域」という母が、「観光客」という子どもに作るさるぼぼ

店の一角にさるぼぼ製品がズラリと並ぶ光景は、いまや高山市街地の土産物店では決して珍しくない。いったいいくつ置かれているのだろうと数えてみたい衝動に少し駆られたが、やめた。かなり時間がかかりそうだ。10年ほど前に高山に来た時は、これほどではなかった。これは、さるぼぼが現在、それだけ観光客に受け入られたお土産品に育ったということだろう。

さるぼぼは、ある意味、母から子へと受け継がれるものから、お土産品へとその姿を大きく変えた。しかし、今も変わらないのは、一つひとつ、この地域の女性たちによって丹精こめて手づくりされているということだ。つまり、見方を変えれば、今のさるぼぼは、「飛騨地域」という母が、「観光客」という子どもに心を込めて作っているものなのである。

ズラリと同じようなさるぼぼが並んでいても、購入に際しては、つい心引かれるさるぼぼを探してしまうのも、手づくりならではの良さとともに、つくり手の思いが、それぞれのさるぼぼに宿っているからかもしれない。日本有数の観光地「飛騨高山」とさるぼぼのこれからがますます楽しみだ。

高山市内にある「飛騨の里（飛騨民族村）」。合掌造りをはじめとする飛騨各地から移築された古い民家のたたずまや飛騨の山村の生産用具・生活用具から、昔の人々の暮らしを体感できるところ。やはり、村に入る入り口で出迎えてくれたのは、さるぼぼだった。